



月刊 第 563 号

雌伏の梅雨から

雄飛の夏へ

雌伏・雄飛などと古臭い言葉を使うとウー・マンパワー溢盛な今時、こっぴどく叱りとばされそうな気がするところであるが慣用句であるのでご容赦願いた

海の町観光の町を自認する寺泊にとって梅雨の季節は来るべき夏に向けて準備を進めながらばつと憂鬱の季節を破って明るい夏空が開ける日をじつと待つ時であり、まさに雌伏から雄

飛への時と言うべきであらう。だが今年は何やらいつもの年とは天候の運びが違いうようで、四月末から雨や風が少く照る日が多く農村部でも稲がのび過ぎこれは喜ばしいことではなく収穫に悪い影響が出そうとの心配の種である。

梅雨前には松の花からうす緑色の花粉が飛んで毎朝廊下や縁側が黄色になるのだが全くそれもなく、已に松の花は連日降るように落ちて、松の木の多い寺の石段は掃除に追われる毎日である。風つづきの海も魚にはあまりよいことではないようで、漁師達も「ちつとばかかんもして貰わんとさっぱりだめらてばね」

と。観場をのぞいてみると魚も春から夏へと変わり時で、ねずら、きす、こうぐり、小鯛、甘鯛といかにも初夏の魚、夏の味を代表する魚達が姿を見せ、夜はイカ釣り船の灯火が佐渡の空を赤々と染め、寺泊の沖合では釣船の灯が点々と揺れている。

イカ釣り船団が沢山寺泊の港に寄港した時代もあり、宿泊の上でも又夜の酒場でも長崎や隠岐の方言が聞かれたものであるが最近はその姿は見られない。イカは南西から北東の海へと季節と共に移動し、イカを追って船団も移動する。今は佐渡沖あたりが漁場と見えて佐渡が島やその上空の雲が

見える程に漁火が連夜燃える。夕方になると釣船は一齐に出港して潮流に乗ってカミからシモに向って流れる。点々と見えなるとシモ沖でひとかたまりに見えるようになり、灯が消えたかと思ふと次第にエンヂン音が夜の海に響きはじめ次々に帰港港は点灯した船の明りで何事かと思う程に明るくなる。

三々五々船から下ろすクーラーボックス。大漁した釣人は蓋を開けて恵比寿顔で中を見せてくれる。まだピクピクと活きているイカが生ゴム色で光っている。あまり漁果のかんばしくない人はそくさと車へ。やがて何事もなかったように港は闇に。



中央埠頭のシンボルタワー、汐風のメロディー、お天気がよい日は色々な人が集る。親子の散歩姿はこの場所によく似合う。



文化センター「はまなす」をバックに群生するハマダイコン。春一番に咲きはじめる花である。



ニセアカシアは寺泊の町木。5・6月の海浜公園の空に咲き競う。

「観音講」

さとらう・のぶひと

寺泊の六月の伝統行事は何と
いっても観音講でしょう。片町
の照明寺さま観音堂で執り行わ
れるこの宗教行事は、初夏の寺
泊を彩る風物詩です。六月十六
日から十八日までの三日間、近
隣から駆けつけたご同信の方々
で境内は賑わいます。とくに十
七日は、一日中観音堂から読経
の聲が響き、お参りの人々で溢
れかえります。

世話方のおばさんによる「ほ
ら一丁、また一丁」というご灯
明追加の元気のいいかけ声。良
寛ゆかりの密蔵院もこの日ばか
りは開け放たれ、誰しも内部の

見学ができます。そして、柏崎
の閻魔市などから流れてきた露
店商の夜店が、参道の両側を埋
め尽くします。

ちょうど梅雨と重なり、昼間
の蒸し暑さから解放された初夏
の夕べ、片町の通りから長い石
段をいくつもの登って読経の絶え
ない観音堂にたどり着きます。
お焼香のおいと人いききでむ
せる中、お参りを済ませます。
そしてお堂を降り、右手の密蔵
院に入り、良寛ありし時代を偲
びます。

一つ目の石段を下りきった左
手に威徳明王の石像を祀る祠が
あり、中は、冷えた清水が龍の口
から流れ落ちて、汗がさっと退
きます、清水を柄杓に汲み、タオ

ルをかぶった石像の頭上からか
けます。身体の病んでいるとこ
ろや悪いところがあつたら、明
王のその部分をさすつた後、自
らのその部分をさすと治ると
いう言い伝えがあり、目の悪か
た筆者は子供の頃、母親からよ
く目蓋をさすつてもらいました。

押すな押すな狭い参道両側
に立て込んだ夜店を冷やかしの
がら行くと、二つ目の石段の降
り口に白衣の傷痍軍人が何人か
立っていました。もちろん筆者
が子供の頃の話です。今の子供
や若い世代に「傷痍軍人」など
と言つてもきつと判らないでし
ょう。

戦争で手足を失つたかわいそ
うな人、と親から教えられるま

で筆者も判りませんでした。国
家に対する恨みつらみのような
ものが伝わってくるからでし
ょうか、子供心にも戦争の怖さを
感じて、ここだけは避けて通
つたことを記憶しています。

この二つ目の石段を下ると左
手に食堂があつて、かき氷とト
コロテンの出店(でみせ)にな
つていました。ここで休憩し、ト
コロテンを食べたものです。
涼しげなガラス容器に酢と醬
油で味付けされたトコロテンが
盛り付けられ、割り箸の片割れ
一本で食べるのです。食べると
言うよりは、すすると言う方が
正しいでしょうか。その美味し
かったこと、今でもその味を忘
れることができません。

今年の六月十七日は火曜日で
した。前の晩からの雨で、照明
寺さまの境内は多少ぬかるんで
いましたが、朝のうちに雨はあ
がり、曇天のうつつとおしい梅雨
空ながら、丸一日もちました。

夜九時半過ぎ、「おこもり」
の様子を取材しようと思ひ立
つて、再び観音堂に出かけました。
参道の照明はあかあかとしてい
ましたが、すでに夜店は後片付
けが始まり、お参りもまばらで
した。片付けに余念のないタコ
焼き屋のお兄さんに、

「お客さんの出はどうでした
か？」と水を向けると、
「今年は、全然ダメだったねえ」
とそっけない返事でした。
観音堂でも世話方による片付



観音講は梅雨から初夏へのかけはしとなる行事。
石段から境内、観音堂へと献燈の列がつづく。
夜店も大事な演出。



ハマナスは寺泊の花。
紅、白、八重と咲きみだれる。
花びらが汐風にふるえる。



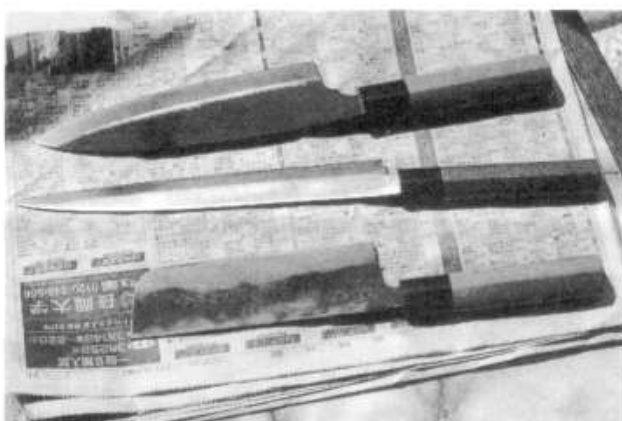
砂浜一面に咲くハマヒルガオ。
これからはハマニガナ、マツヨイグサ(月見草)が寺泊
の海のシーズンとともに咲きつづく。



橋本直行油彩展 7月14日(月)~19日(土)
銀座みゆき通 文芸春秋画廊
☎ 03(3571)6493



松井武作品展 8月19日(火)~24日(日)
渋谷神宮前 新潟館ネスパス
☎ 03(5771)7711



寺泊の無形文化財鈴木清鳳さんをお願いしておいた包丁が出来上ってきた。
三点セット、一生涯使うことになる。

けが始まっています。しかし、不思議なことに、堂内で今晩「おこもり」をするご同信の方々の姿は見当りません。その場にちようど照明寺さまがおられたので、聞いてみました。
「あれは二十年前くらい前から、なくなりました。野積の人が多かったのですが、今は遅くなってもクルマで帰れますからね」とのことでした。

照明寺さま観音堂は「越後三十三観音霊場、第二十番札所」になっていきます。観音信仰の歴史は古く、法隆寺夢殿の聖徳太子まで遡ることができそうです。以来、広く現世利益の民衆信仰として親しまれ、霊場めぐりの巡礼が大衆化します。

芸術の町寺泊

札所の順序や服装、御詠歌など、今日見られる巡礼のスタイルが定まったのは、十五世紀ごろからと言われています。近世には全国各地に百におよぶ三十三所が形成されました。三十三という数は、観音菩薩が衆生を救うために三十三に身を変じたところから出ています(中村元他編『岩波仏教辞典』岩波書店、一九八九年)。
町在住の人又出身者、多方面で多くの方が活躍しておられるが、芸術関係でも多くの方が居られる。
特に今年の県展では多くの入

県展奨励賞では書道の川端光子さん、日本画の三輪ヒロ子さん(現吉田町在住)、入選では書道で有坂静雲さんは常連であり西山孝さん、藤田優子さん、日本画佐藤準子さん、洋画三浦猛幸さんは共に常連、版画では和田幸蔵さん、吉川実さん(現与板町在住)が入選された。
他に写真や絵画で活躍されて居られる方々もおられ、文化祭に合わせて特別展が開催される。この夏二人の寺泊人の個性が東京で開催されるので関東圏にお住いの方々は都合をつけて是非ご覧いただきたい。
橋本直行油彩展は銀座みゆき通りの文芸春秋画廊。
「沖繩・八重山の太陽と美ら海

に惹かれ幾度となく島へ通って輝く空と光と珊瑚の海が放つ宝石の色彩——息をのむ風景の瞬間をタブローに封じ込めたいと思った。」と彼は言ひ。一九六二年生れである。
松井武作品展は渋谷神宮前通新潟館ネスパス地下鉄表参道駅出口A2又JR原宿駅徒歩十分。
ストーンベインティングと寺泊の風景。全国各地で採取した石にアクリル絵の具で着色。鳥、昆虫、魚、野菜、果物等本物と見違えそうな作品が並ぶ。
寺泊の流木などと組合わせた作品一〇〇〇点と寺泊の風景五十点の展示である。彼は一九四四年生れである。
両会場ともに交通の便のよい

誌代御後援(敬称略・順不同)

- | | | |
|-------|--------|------|
| 富山市 | 久住 吉雄 | 金五千元 |
| 新潟市 | 佐野 キク | 金五千元 |
| 高木 辰男 | 金三千元 | |
| 松井 武 | 金一万元 | |
| 越智すい子 | 金三千元 | |
| 平林 ミネ | 金五千元 | |
| 山澤 次郎 | 金三千元 | |
| 三上 英雄 | 金三千元 | |
| 前橋市 | 摩庭 ハナ | 金三千元 |
| 倉吉市 | 大宮 和正 | 金三千元 |
| 松戸市 | 山田 新太郎 | 金五千元 |
| 寺泊町 | 桑原 亮平 | 金五千元 |
| 〃 | 篠原 正 | 金五千元 |

会場なので友人知人などにもご紹介お誘い下さって是非激励にお出掛け頂きたいと思ひます。
文春画廊は十一時~七時
ネスパスは十時半~六時半
勿論入場無料です。よろしく。

小波会六月旬会詠草

兼題 卯月・夏帽子他当季

朝もやの

野良に人あり卯月かな

竹内 霍山

卯月には

卯月の賑わひ五・十市

大越碧水子

口笛の

子等と行き交う卯月かな

能登 頑牛

卯月来る

ショーウィンドーの

おしゃれ靴

小形 美代

泣きやんで

手に綿菓子の子

外山 海子



赤物と言われる魚は高級魚が多い。
小鯛は梅雨時が旬。何と言っても塩焼き。
甘鯛はあんかけ、焼き物、蒸し物と上品な味。

山の宿

卯の花月の同級会

矢尻ゆきを

受けついで

畑を見回る夏帽子

水沢 蕉子

旅人と

なりて楽しき夏帽子

中村 流瓢

妻褒めし

値札のありて夏帽子

内藤 広利

夏帽子

届き退院間近なり

加勢 白汀

投げ置かる

疲れ切ったる夏帽子

小島 温石



夏の魚は何と言ってもキス。細作の刺身は抜群。
魚偏に貴と書くものの、悪食・多産では他の追従を許さない。

喜寿迎え

しみじみ浸る菖蒲の湯

外山きよし

飛び交ひて

巢立促す親燕

江原 汀子

どくだみの

花しろじろと闇に浮く

斉藤 紫苑

山法師の

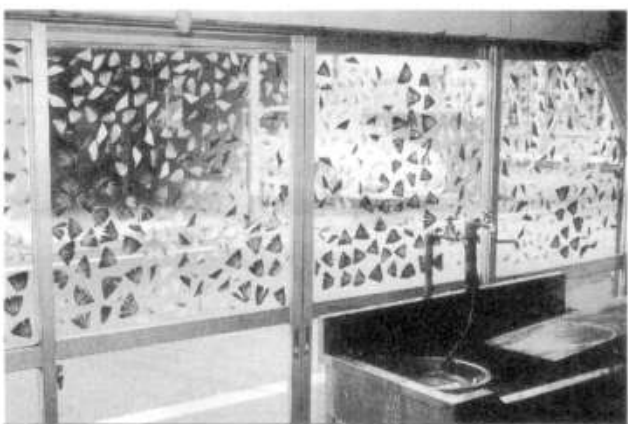
花楚々として映乙女

小島 冬扇

あとがき

海岸では次々に海浜植物が咲きつづく。

ハマダイコンの薄紫色、ハマエンドウの濃赤紫色、それ等は自己主張するように群生してテ



ヒレ酒用のフグのヒレ。
暗いタタキの調理場から写真にすると一寸したイラストに見える。

リトリーを抜けてゆく。
やがてハマヒルガオがどどんとん蔓を延ばして砂浜を這い、砂山をのぼり薄ピンク色の花が次第に咲くとそれと競うように寺泊の町木であるニセアカシアの白い花房が汐風に揺られて甘い香りが海浜公園に溢れ蜜蜂が飛び交う。
ハマナスは他の花に比べあてやかである。白と紅、棘がびつしり生えている枝の部分とは似つかない薄い花弁が微かな風にも震えて可憐である。
道路脇の土手には振り花(モジズリ)がこれこそピンク色と言うべき美しい花を咲かせている。小さな花で目立たないものがあるがそれだけに魅かれるもの

がある。客土された土に混じって運ばれてきたものであろうが強力な生命力繁殖力で土手を埋めつくす程の勢いで拡がってゆく。
やがて初夏の日射しと風の中でネムの花の季節となる。
毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共(百円)
編集人 中 村 興 樹
発行人 新 潟 県 寺 泊 町
発行所 ふるさとだより
郵便番号 九四〇―二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五
電話 二〇二九番
振替番号 〇〇六二〇三五四四五
印刷所 吉野印刷株式会社